

「化学コミュニケーション賞」の顕彰と入門書「化学コミュニケーション」の刊行

2011年の世界化学年を記念して、公益社団法人日本化学会など化学関連の17学会で構成される一般社団法人日本化学連合では、(株)化学工業日報社の共催、(独)科学技術振興機構の協賛のもとに、『「化学」に対する社会の理解を深めることに貢献した個人及び団体を顕彰し、その栄誉を称える』ことを趣旨とする化学コミュニケーション賞の顕彰を始動しました。

2011年4月11日(月)～6月30日(木)に設定された応募期間に、合計28件の自薦または他薦による応募をみることができました。応募資格は個人・団体いずれでも可ということにしてありましたが、結果は、14件が個人、残りの14件が団体に区分けされるものでした。

この28の応募案件について、募集要項の対象業績で予め謳われている、『わが国において、化学・化学技術に関する社会への啓発活動、情報発信を通じ、「化学」に対する社会の理解を深めることに貢献した業績』の観点に基づいて、まずは10名で構成された予備選考委員による書面評価と合議審査を行い、個人9件、団体5件を受賞候補案件として選出しました。

次に、この14の案件を、今度は6名で構成される最終選考委員の全員に通知して、まず書面評価によって個人、団体の各々について順位付けを行い、それを集計した資料に基づいて2011年9月13日(火)に開催された最終選考委員会において審議を行いました。その結果、下記の通り、化学コミュニケーション賞2件(個人と団体各1件)と審査員特別賞2件が選定され、2011年10月28日(火)に学術情報センターにおいて開催された表彰式において顕彰されました。

こうした一連の選考過程では、選定するための基準として、①社会へのインパクトの大きさ、②これまでの継続性と今後の発展性、③オリジナリティ、④顕彰によって今後の活動へのプラス効果が期待されるか、そしてそれに加えて、⑤化学的要素の度合い、を念頭に入れて行われました。最後の「化学的要素の度合い」については、本賞が「科学」コミュニケーション賞ではなくて「化学」コミュニケーション賞であることを特に意識するためです。また、教育的な視点に偏った功績ならびに本務の活動そのものとみなされるものについては、今回は対象外としてあります。

(詳細については、日本化学連合のホームページ(<http://www.jucst.org/>)のなかに掲載されている「日本化学連合ニュース」のNo. 58, 61, 65, 68, 71, 72, 73などをご覧ください。)

2011年 化学コミュニケーション賞【個人】

受賞者名 佐藤健太郎(東京大学大学院理学系研究科化学専攻)

業績の標題 『ウェブ・書籍などを通じた化学コミュニケーション活動』

[選考理由] 有機化学・創薬化学分野での独自性の高い出版ならびにWebの活用を含めた、広範かつ精力的なコミュニケーション活動を高く評価する。どちらかというところ専門家向けに偏りがちな内容を、授賞対象者の化学コミュニケーションに対する強い熱意をもって、様々なツールを活用することで、中学生から専門家まで幅広い層への展開を図っていることも評価に値する。

2011年 化学コミュニケーション賞【団体】

受賞者名 株式会社クラレ

業績の 標 題 『20 年に及ぶ「少年少女化学教室」の実践』

[選考理由] 一企業の CSR 活動の一環として、地域社会との調和のとれた共生を目指して、およそ 20 年にわたって継続されている社員のボランティア参加による、小学生を対象とする地道な化学コミュニケーション活動を高く評価する。活動地域も開始当初の倉敷からその後数を増やし、現在では全国 5 事業所に拡張していることも評価に値する。

2011 年審査員特別賞

受賞者名 戸谷義昭（愛知教育大学理科教育講座化学分野）

業績の標 題 『化学の普及と大学授業とを両立させる出前化学実験』

[選考理由] 教育系大学教員の立場で、子供のみならず幅広い層への出前化学実験などの独自性の高い啓発活動の積極的な実践を評価する。ボランティアの学生と協働することで、コミュニケーター一育成の視点も取り入れた活動である点も評価される。

2011 年 審査員特別賞

受賞者名 藤井豊・浅原雅浩・田中幸枝（福井大学医学部／教育地域科学部／医学部）

業績の標 題 『分子模型教材による化学コミュニケーションの推進』

[選考理由] 独自に開発した分子模型教材の活用を志向した、地域密着型の多彩なコミュニケーション活動と言える。10 年に及ぶ活動実績があり、コンピュータ画像に頼りがちな現在において、自分の手で作る分子模型のもたらすリテラシー効果に期待するところは大きい。

一方、この化学コミュニケーション賞の顕彰の企画に併せて、「化学」を正しく理解し、伝えるためにいま何が必要かを訴えるための入門書、『化学コミュニケーションー「社会のための化学」推進に向けてー』が 2011 年 12 月に化学工業日報社から刊行されました。

(<http://www.kagakukogyonippo.com/pub/index.html>)

人間が生活するための環境の保全是もとよりのこと、自身の身体そのものから身の回りで日常接する諸々の物品に至るまで、化学と人間生活とのかかわりが極めて大きいことがよく分かります。近年、その重要性が次第に巷間で話題になり始めている科学コミュニケーションのなかでも、化学分野に関わる双方向のコミュニケーションを構築することは、その意味でも極めて重要な課題といえます。こうした認識のもとに、化学の分野で研究や教育、情報、コミュニケーション、それに民間企業などに携わる人々からの視点で、化学コミュニケーションの重要性についてそれぞれの考えるところが、次の章立てで述べられています。

『化学コミュニケーションー「社会のための化学」推進に向けてー』（化学工業日報社 2011. 12）

第 1 部 基礎編

第 1 章 化学コミュニケーションとは ー「社会のための化学」を推進するために

第 2 章 科学コミュニケーションと化学コミュニケーション ーその難しさを乗り越えるために

第3章 化学コミュニケーションと学校教育－化学コミュニケーション推進のために求められる
学校教育

第4章 “化学”を知るための情報ツール

第2部 実践編

第1章 化学産業は市民に何を伝えなければならないか－リスクコミュニケーションとSR

第2章 「有機化学美術館」の13年－手探りの化学コミュニケーション

あとがきにかえて －化学コミュニケーションへの期待

以上

伊藤 卓 記